

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Importance of Cultural Heritage in Ecotourism : A Case Study of the Tikar People in the Republic of Cameroon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下休場, 千秋 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001588">https://doi.org/10.15021/00001588</a>

## エコツーリズムにおける文化遺産の価値 カメルーン共和国, ティカールの事例

下休場 千秋  
大阪芸術大学芸術学部

### The Importance of Cultural Heritage in Ecotourism A Case Study of the Tikar People in the Republic of Cameroon

Chiaki Shimoyasuba  
Osaka University of Arts

1960年代から先進工業国において、自然環境の悪化や公害が重大な社会問題となり、「エコロジー思想」や「持続可能な発展」の概念についての議論が活発化した。アメリカの造園家・イアン・L・マクハーグは自著『デザイン ウィズ ネーチャー (Design with Nature)』において、地理情報システムを応用した土地利用計画手法としての「地域生態計画 (ecological planning)」と汎神論的な「エコロジー思想」を提案した。筆者が1987年以来、アフリカ、カメルーン共和国北西州で行ってきた現地調査において、ティカールの王制社会の人びとが継承してきた王宮を中心とする民俗文化やアニミズム的な土着宗教に、彼らの自然観やエコロジー思想の存在を確認することができた。この地域は旅行者が学ぶべき文化遺産としての民俗文化や豊かな自然が存在するためエコツーリズムの可能性が高いところであり、地域生態計画は環境保全を前提とするエコツーリズムの実施に重要な役割を果たす。

The deterioration of the natural environment and serious pollution became a major social problem since the 1960's in industrialized countries, and vigorous discussion about the "concept of ecology" and "sustainable development" took place. The American landscape planner Ian L. McHarg in his book "Design with Nature" proposed "ecological planning" as a land use planning technique in which a geographic information system was applied. This author was able to identify the folk cultures with royal palaces and animism in the indigenous religion, such as that inherited by the monarchy of the Tikar people during field research in the North-West Province of the Republic of Cameroon that he conducted since 1987. There are folk cultures and a rich natural environment in this region, and tourists have a lot to learn from them. This region has a high potentiality for ecotourism, and ecological planning can be used to protect the environment while doing environmentally suitable ecotourism.

1 序論	2.3 アウイン湖の観光開発
1.1 本研究の問題意識	3 文化遺産としての王国文化
1.2 マクハーグのエコロジー思想	3.1 王宮の空間構造
1.3 アフリカ王国文化の土着宗教	3.2 王宮のコスモロジー
1.4 生活空間の文化	4 考察
2 カメルーンのエコツーリズム	4.1 文化遺産とエコツーリズム
2.1 観光の本質	4.2 今後の課題
2.2 自然と文化の観光価値	

\* key words: Cameroon, divine king, animism, ecological planning, ecotourism

\*キーワード：カメルーン，神聖王，アニミズム，地域生態計画，エコツーリズム

## 1 序論

### 1.1 本研究の問題意識

ヒトは太古より、厳しい自然環境に適応し生存するために、自分たちの住む周囲の自然環境に手を加えることによって、住居や集落を造り、都市を建設してきた。その過程において、身近な自然環境を改変する歴史を繰り返してきた。ところが本来、自然に適応するための手段であった「ヒトの自然を改変する技術」が、ここ百年余りの間にヒトの生存基盤である自然を汚染し、破壊し、喪失する原因を作り出すようになった。このような傾向は、18世紀末のヨーロッパに始まる産業革命以後における科学技術の発達によって強まったと、一般的に言われている。

環境デザイン分野における地域計画を専攻する筆者の本研究における問題意識は、1986年度に始まった大阪芸術大学による「アフリカの伝統工芸に関する民族学的調査研究」（代表 森淳名誉教授）の一員として現地調査に参加し、カメルーンを始めとするアフリカの自然・文化に接する経験を得たことにより、ヒトが自然をどのように認識し、自然環境に対してどのように働きかけるのか、というヒトと自然との関係を追求する生態学的な視点の重要性にあった。そして、この調査を契機に、アフリカの民俗文化に関する調査研究を開始したのである。

本研究は、アフリカにおける筆者の現地調査を通じて得た資料を基にして、民俗文化に固有の自然環境に神聖なものを感じ取るアニミズム的、汎神論的な信仰の側面から人間の自然観について検討を加えることにより、エコツーリズムの環境教育的側面を考察する上で重要な「エコロジー思想」に対して、筆者自身の構想する幾つかの提言を行うことを目的としている。具体的にはカメルーン共和国北西州に居住する農耕民・ティカール（Tikar）について、筆者が1987年1月から2003年12月まで、計8回にわたる現地調査において得た資料のうち、とくに王宮を中心とする生活空間の構造やそこで催される諸儀礼を通じて、神聖王国のコスモロジーについて分析する。そして、ティカール

の人びとが思惟するアニミズ的な自然観を明らかにするとともに、これらの王国地域を訪問する旅行者が、民俗文化の中に内包されている非西洋的なエコロジー思想を学ぶ意義と方策を探ろうとするものである。

## 1.2 マクハーグのエコロジー思想

### (1) 環境デザインにおけるエコロジー思想

1960年代から70年代において、ヒトが為す様々な地域開発による公害を初めとして自然環境の破壊や歴史環境の喪失などの生活環境問題に対する関心が社会的に高まった。そのため、環境デザイン分野においては、1970年代から地球環境の持続可能な開発という新しい概念が議論されはじめた。この概念は1980年に国際自然保護連合(IUCN)が提言した「世界保全戦略」の中で初めて公式に使われた。その後、「持続可能性」と「持続可能な発展(sustainable development)」は環境問題を考える際の新しい指導原理となった [IUCN 1980]。

この概念については様々な定義がなされているが、その一つに「持続可能な開発とは、生態系がもつ環境容量の範囲内において、人間の生活を物質的な面から量的にだけ捉えるのではなく、快適性や精神的な豊かさを追求していくものである」という定義がある [IUCN/UNEP/WWF 1991]。また前述した「世界保全戦略」の中においても持続可能な開発とは、生態系の適性評価、環境アセスメント、これらの評価とアセスメントに基づいた環境資源の利用によって可能になるとも定義されている [IUCN 1980]。

そして、ヒトを含む自然生態系を望ましいかたちで持続的に利用してゆく可能性についての議論を踏まえて、過去30年余りの間に地球上の生態系を、どのように持続可能なかたちで開発すべきかについて多種多様な「地域生態計画(ecological planning)」論が案出された。それらの中でも、I.L.マクハーグ(Ian L. McHarg)<sup>1)</sup>が1969年に出版した著書“Design with Nature”において示したエコロジーの思想と計画方法論は、環境の保全と開発との統合をめざす持続可能な開発についての概念を明確に示したもののとしてこれまで注目されてきた [MCHARG 1969] [マクハーグ 1994] [SHAPIRO 1997]。

筆者は、マクハーグが自著の中で述べた「エコロジー思想」が、アフリカを始めとする非西洋世界の人びとの自然観から示唆を受けたものであることに注目したい。英国のスコットランド生まれの米国人・マクハーグの父親は、敬虔なキリスト教の牧師であったにもかかわらず、マクハーグは幼い頃より、キリスト教の教えとは矛盾する汎神論的な自然観の重要性に気づいていたのである [MCHARG 1996 : 17 - 18]。本節では、マクハーグが提唱したエコロジー思想について考察をする。

### (2) デザイン・ウィズ・ネイチャーとは

マクハーグが提唱した地域生態計画の概念は、彼が自著の題名で用いた“Design

with Nature”という言葉が示すように、自然環境を支配する生態学的原理の科学的理解を基本とした計画（地域生態計画）という意味をもつ。彼は地域生態系を自然の動態的な相互作用システムであると定義した上で、持論を展開させて、「地域生態計画を、人間の多様な環境利用に対して、地域生態系が示す本質的な可能性と制限を明らかにする手法である」と述べている [マクハーグ 1994：89-103]。そして、その具体的な計画手法としては、地域生態系の変遷を示す環境の構成要素である地質、地形、土壌、植生、地表水、土地利用などの地図を重ね合わせることにより、土地利用に対する可能性と制限の度合を地図上に視覚的に表現することを提案した。このマクハーグの提唱した地理情報システムの基本的概念による計画手法論は、現在では土地利用の立地適性評価や環境アセスメントなどの持続可能な開発の前提となる環境資源の適切な利用には不可欠なものとなっている [マクハーグ 1994：113-125]。

筆者もまた環境容量を超える環境破壊を、適性な土地利用計画を行うことによって未然に防止する計画手法として、マクハーグの地域生態計画は環境デザインやエコツーリズム計画にも有用な論説であると考えている。彼が地域生態計画の概念を用いて説明しようとした自然観は、自然をヒトにとって無限に利用可能な資源であるという従来の地域計画における自然観と大きく異なるものである。それは地球生態系の進化・創造過程、物質循環、エネルギーの流れと熱力学上のエントロピー (entropy)、恒常性 (homeostasis) などの生態学の原理を援用することにより、ヒトも地球生態系の一員であることを強調した。彼のエコロジー思想は生態系の自然科学的理解にとどまらず、生態系の一員としてヒトがどのように行動すべきか、あるいはどのような自然観をもつべきかについて倫理観、道徳観、審美観にまで立ち入ることを要求しているのである。

### (3) マクハーグの汎神論的宇宙観

マクハーグは自著“Design with Nature” [マクハーグ 1994] の各所において、近代の西洋の人びとが信じるユダヤ教やキリスト教における世界の創造物語に由来するヒトを中心とする自然観によって、今日の生態学的な価値を正しく評価しえない経済構造が造りあげられたという問題点を指摘する。そして、彼は西洋以外の世界各地にみるアニミズムなどの汎神論的信仰、また東洋に広がる仏教、道教、神道などの宗教や風水思想の中に、近代西欧人のいう自然観とは異なる、マクハーグ自身が提唱するエコロジー思想により近いものが存在していると述べる。また彼は自著の中で、米国のインディアン、オーストラリアのアボリジニ、古代ギリシャ、日本の伝統文化などにおける自然観を事例に挙げて、ヒトにとっての自然の生態学的価値を汎神論的宇宙観に基づいて見直す必要があると強調する。地域生態計画は、西洋の生態学を中心とした自然科学的知識を駆使して適切な環境利用を図る計画手法であると同時に、自然環境破壊の原因といわれるユダヤ教やキリスト教をベースとする西洋の唯一神的思想は、ヒト中心の自然観を構築させてきたものであるとし、この自然観をあらためることにより新しいエコロ

ジー思想に基づく自然観、倫理観の確立がなされなければならないと論じている。

このようなマクハーグの提唱した西洋近代における生態学を中心とした自然科学的知識に基づく非西洋哲学的な自然観、倫理観は、その多くが非西洋文化圏に属する第三世界諸国における環境デザインのあり方を考える上で、重要な意味をもつと、筆者は考えるのである。

以上の論点を踏まえて、本論文では、筆者の中央アフリカ、カメルーン共和国における現地調査で得られた資料を基にして、北西州に居住するティカールの人びとが現在も保持している王国文化と王国で継承されてきた倫理観や自然観を取り上げる。そして、マクハーグのエコロジー思想を基底にして、ティカールの人びとの文化を考察し、この地域を訪れる旅行者が観るべき民俗文化と世界観について考察する。

### 1.3 アフリカ王国文化の土着宗教

#### (1) コスモロジー（宇宙論）について

コスモロジー（宇宙論）とは、ある文化なり社会なりがその存在基盤たる自然の秩序とそこにおける人間存在の究極的な意味づけをめぐって形成する、体系的で集会的な世界観であると定義することができる [嶋田義仁 1998: 14]。コスモロジーの語源であるコスモス (cosmos) は、「無秩序」という意味のカオス (chaos) に対して、「宇宙」や「秩序・調和」という意味をもつ。筆者はヒトが生きてゆく上で、心の拠り所となる世界観をコスモロジーということばで表現することにした。何故ならば、ヒトは人間を含む地球環境や自然の秩序を認識し、従うことによつてのみ生きることができると考えるからである。

本論文で対象とする中央アフリカのカメルーン共和国におけるティカールの人びとのコスモロジーを理解するには、彼らが伝承してきた「神聖王」<sup>2)</sup>を頂点とする王制社会組織と、彼らの汎神論的・アニミズム的な自然観、また祖先崇拝という固有信仰に対する考察を抜きにして考えることはできない。

筆者が調査期間中に接してきたティカールの人びとの生活文化から、「神聖王」を取りまく彼らのコスモロジーを、目には見えない自然の作用や、生死を始めとする人間の力の及ばない超自然の力に対する畏敬・畏怖の念に基づき構築されてきた世界観であると言えよう。そして、王国の集落・住居空間はそのような世界観に基づき、ヒトの日常的生活空間と祖霊や精霊が宿ると考えられている聖なる空間との分節化が図られ、その中において人びとの生活が営まれているのである。

そのため本論文において、彼らの王国文化を「コスモロジーと空間」の視点から捉え、その自然観を明らかにしたい。そしてこれらの考察を基に、自然環境と調和した持続可能な発展に対する示唆を与えてくれるティカールの人びとが継承してきた王国文化の、エコツーリズムに関連する環境教育的価値についても論じたい。

## (2) アフリカ農耕民の世界観

アフリカ各地に現存する多くの王国が伝承してきたコスモロジーのベースとなるものには、アニミズム的信仰を多く反映させていると考えられるものがある。そのため、まず彼らの土着宗教について分析する必要があるが、当然のことながら、王制社会組織の宗教的基盤も彼らの居住する地域の土着宗教にある。しかし、アフリカの宗教は多様であり、土着宗教を基底にし、近年になって導入されたイスラム教、あるいはキリスト教教義が重なっているものも少なくない<sup>3)</sup>。

本論文に主として取り上げるティカールの人びとの王国、例えばバフツ (Bafut) 王国の宗教の現状はキリスト教が主流を占めている。しかし、その教義の解釈には、王を神として戴く「神聖王」の観念の基盤である土着宗教との混交がみられる。土着宗教を基盤とする北西州の神聖王の中にはキリスト教会で礼拝するバリ (Bali) 王国の王の例もある。また、西州のフンバン (Foumban) 王国のように、王自身がイスラム教に改宗した例もある。

アフリカの土着宗教を理解するためには人びとの宇宙論なり世界観の体系を知る必要がある。たとえば、J.ヤーンはアフリカの伝統的世界観として、その著書『アフリカの魂を求めて』において、ルワンダ出身の哲学者・アレクシス・カガメ (Alexis Kagame) の著作内容<sup>4)</sup>をもとにして、ムントウ (Muntu) = 「ヒト」、キントウ (Kintu) = 「事物」、ハントウ (Hantu) = 「空間と時間」、クントウ (Kuntu) = 「様相」の四つの基本概念を示している。さらにこれらの全ての範疇に共通する語幹・ントウ (ntu) について次のように説明する。「ントウは、直ちに普遍的力なのである。とはいえ、普遍的力としてのントウは、その発現であるヒト、事物、空間と時間、および様相から離れて現れることは決してない。ントウは存在それ自体であり、宇宙の普遍的力である。そしてこの普遍的力を、この力のさまざまな発現から抽象しうるのは、ただ近代の、純理的思考だけである。ントウとは、存在と存在する物とがその力によって合体するようになる<sup>5)</sup>」[J. ヤーン 1987: 115] と述べている。

また、筆者がこれまで観察してきたカメルーン国内の多くの王国でも、王国のリーダーである王を、観念的に人間界と自然界と霊界とを結びつける神のような聖なる存在、「神聖王」として捉えている。このような王に対する観念と地域の人びとの伝統的世界観に支えられて、王制社会組織を中心とする王国文化が維持されているのである。

また、ティカールの土着宗教では、神聖王の観念からもいえるように、人間界と自然界と霊界とがより大きな世界の一部を構成しており、それらの世界に存在する全てには「普遍的な力」が働いていると考えているようである。この普遍的な力を本論文では「不可視の力」と表現することにしたい<sup>6)</sup>。

この理由として、現地調査において、ティカールの人びとがさまざまな祭礼時に、住居や王宮内の先祖を祀る場所あるいは集落内の聖地において丁寧に供儀を行うことを

観察した際や、またティカールの王国文化の王制社会組織・祭礼・王宮・民族芸術に接するたびに、人びとの宗教観の根底にあるこの「不可視の力」の働きが王国を動かしているのではないかと、筆者は考えてきたためである。

尚、ティカールの王国文化に関する民族学的資料としては、文部省科学研究費補助金による海外学術調査「熱帯アフリカにおける物質文化の比較民族誌的調査」や国立民族学博物館の共同研究「民族技術からみたアフリカ諸文化の比較研究」に基づく、端信行 [端信行 1989]、ソー・ベジュン・パイアス [Soh 1987]、森淳 [森淳 1980, 1987, 1992]、井関和代 [井関和代 1989] などの多くの研究者による研究が、我が国でもこれまでに蓄積されてきている。また、海外の研究者では、ロバート&パット・リツェンサラー (Robert & Pat Ritzenthaler) [RITZENTHALER R. & P. 1962]、チルバーとカベリー (E. M. Chilver & P. M. Kaberry) [CHILVER & KABERRY 1967]、エレツム・タブウェ (Aletem Tabuwe) [TABUWE A. 1978]、ングワ・ネバシナ (Ngwa Nebasina E.) [NGWA N. E. 1982] が研究報告を行っている。

## 1.4 生活空間の文化

### (1) アフリカの住居

住居は、人びとの生活空間であるとともに、これらの建つ地域において入手可能な建築材料を用いて自然環境に適応するために、創造されてきた人工的空間でもある。特に伝統的住居には、そこに居住する人びとの自然観やコスモロジーの構築が成されてきた。そのため、住居やそれらが集合する集落のあり方を分析することにより、それらの空間構造と機能の中にそこに暮らす人びとのコスモロジーを垣間見ることができる。

これまでにアフリカ大陸全域の伝統的住居をまとめた文献のうち、スーザン・デンヤー (Susan Denyer) は、アフリカの多様な住居建築を整理し、自然環境及び技術・宗教・防衛などの社会・文化環境との関連性について述べている [DENYER 1978]。そしてポール・オリバー (Paul Oliver) は、西アフリカの住居形式をその平面形態・屋根形態・使用材料とによって類型化し、それらの分布を明らかにしている [OLIVER 1971]。また建築家のアモス・ラポポート (Amos Rapoport) は、世界中の主な伝統的住居の事例を示した上で、住居形式を決定する諸要因として、気候・立地場所・材料・構造・技術・防衛・宗教・経済などを挙げ、これらの中の物的要因よりも、社会・文化的要因を重視する必要性が高いと述べている [RAPOPORT 1969]。さらに、アロン・S・ネバ (Aaron S. Neba) はカメルーンの地誌をまとめ、その一部として伝統的住居や集落空間の地域性について報告している [NEBA 1987:44-58]。一方、調査地となったカメルーン西部地域には、バントゥー (Bantu) 系諸族を中心とする多くの民族集団が居住しており、これらを、高原のグラスフィールドに居住するセミバントゥー (Semi-Bantu) 系諸族と、海岸低地や内陸平野に居住するバントゥー系諸族とに区別す



ることが多い [LACLAVERE 1980] [NEBA 1987]。

以上のような資料から西部高原地域のセミバントゥー系諸族と、海岸低地や内陸平野に居住するバントゥー系諸族を比較してみると、集落空間の特徴に関しては、前者の集落は草原地域に住居が分散して立地する散村 (dispersed settlement) の形態を示し、後者の集落は、森林の中に孤立して立地する集村 (agglomerated settlement) 形態の中でも、特に、住居が道路沿いに並んで立つ沿道村 (road village) の形態をとるものが多い。住居建築に関しては、両者とも、矩形の平面と土間形式の床をもち、前者は、ラフィアヤシ (Palmae 科 *Raphia farinifera, koue*) の葉柄、草、泥、日干し煉瓦などを材料とした寄棟型の屋根形態が中心であり、後者は、木、小枝、ヤシの葉、泥などを材料とした切妻型の屋根形態が多いことが判る。また、王制社会組織が発達している前者の集落構成要素の特徴として、一般的住居と比較して規模の大きな王が居住する王宮に注目する必要がある。

## (2) ヒトの自然観と空間構造

本論文における筆者の問題意識は、マクハーグを始めとする先行研究者たちが提唱するエコロジー思想と、土着的なティカールの民族文化におけるコスモロジーの中にみられる汎神論的な自然観、世界観とを比較し、その差異性や共通性について明らかにすることにより、様々な環境問題を引き起こしてきた近代的な科学技術に基づく大規模な自然改変を伴う人間行動のあり方を改善する手がかりを得ることにある。

また、1987年以来、筆者がカメルーン共和国において現地調査を行ってきた王国文化における集落構造や住居・王宮の空間構造の中に見いだした土着的なコスモロジーの特徴を分析することにより、自然と人間とが共生できるエコロジカルで持続可能な環境デザインのあり方についても模索を試みるものである。

筆者は、中央アフリカ、カメルーン共和国北西州に居住する農耕民・ティカールの人びとの汎神論的自然観が、日本固有の神道やカミに対する観念と驚くほど似ていると考えている。そして、この共通性について、人類に普遍的な自然崇拜、祖先崇拜、アニミズム的な原始信仰が示すコスモロジーと、近代自然科学の知識に基づくエコロジー (生態学) との接点に、持続可能な発展を可能とする人間行動の方向が示されるのではないだろうか、とも考えている。

以上のような仮説をもとに、本論文は、ティカールの人びとの民俗文化に着目し、王宮の空間構造とその機能を分析することにより、それらが示す空間のコスモロジーを明らかにするとともに、地域に古くから居住してきた人びとの生活空間に足を踏み入れる旅行者が、住民の自然観やコスモロジーに敬意を表しつつ、彼らの民俗文化に組み込まれた「エコロジー思想」について学ぶことは、エコツーリズムのあり方を考える際に重要であることを主張するものである。

### (3) 調査方法

カメルーン共和国北西州に居住するティカールの人びとについて、1987年1月から2003年12月までの計8回にわたる現地調査において、バメッシング王国では王の許可を得て、王宮近くの民家に、2度の調査で合計3ヶ月間住み込み、住居空間や王宮空間、さらに集落空間の構造や機能に関する実地調査や聞き取り調査を行った。尚、これらの現地調査は、英語を解する通訳を介して行った。また、バフツを始めとするその他の調査地では、主に王宮については可能なかぎりの立ち入り調査を行い、歩測により建物の平面配置図を作成し、それが不可能な場合は概略図のみを作成した上で、王の従臣達から空間機能についての聞き取りを行った。調査の中で特に感じた困難は、王宮内に王国の人びとであっても、部外者、勿論、筆者も含めて自由に立ち入ることができない空間が存在することであった。しかし、この事項はむしろ、王国の宗教・政治・行政・軍事機能の中心にある神聖王が居住する王宮空間の機能的あるいは象徴的意味の認識を容易とし、王宮空間の把握に役立ったように思える。

## 2 カメルーンのエコツーリズム

### 2.1 観光の本質

観光には様々な定義をつけることができる<sup>7)</sup>。物見遊山的な観光もあるが、観光とは本来、旅行者にとっては非日常的な異文化や自然環境に触れることによって感動を得ることを目的とする旅のことであると筆者は考える。日本の観光が例えば「お伊勢参り」や「四国巡礼」のような社寺への巡拝から始まったように、観光と宗教的な旅は非日常性を体験するという意味では同一のものであった。

ヒトは何故、旅に出るのだろうか。観光の本質について考察するには、その理由を明らかにする必要がある。現代社会においては交通、情報技術が発達し、ヒトは容易に旅行に出かけることが可能となり、自文化とは異なる文化、そして見慣れぬ自然環境や異文化に接触する機会を増大しつつある。未知の世界に対するヒトの好奇心は、地球上のどこかにまだ観ぬ「理想郷」や「楽園」を常に探し求めている、と考えることができる。このように考えると、ヒトが自分にとって非日常的な環境の中に身を置く行動は、その人が生きる上で意味の深い行為であるといえる。観光研究を進めるにあたり、筆者は観光をそのように定義づけたいと考えている。

観光のあり方については、エコツーリズム（自然生態観光）、ヘリテージツーリズム（文化遺産観光）、サステイナブルツーリズム（持続可能な観光）をはじめとする様々な新しい概念が提案されてきている。筆者は本研究において、これらの新しい観光に関する概念に共通する「地域の自然や文化とふれ合う旅」を「エコツーリズム」（ecotourism）という言葉で代表して表現することにする。そこで重視されていること

は自然・文化遺産の保全、地域住民の主体性、観光客の自覚などの問題である〔海津ゆりえ・真板昭夫 1999：27-28〕。例えば、エコツーリズムにおいて観光資源の適切な保全と利用を図るためには、各主体に対してガイドラインの設定が不可欠となってくる。一口でいうと観光関連主体の自然と接する道徳観が問われているのである。

観光を地域住民と、それと異なる文化をもった観光客とが接する社会現象であると考えらるならば、そこにおいて双方の主体が相互に異文化と自文化を理解しようと努力することが重要になる。本章において取り上げるカメルーン国内におけるエコツーリズムの進展や、アウィン（Awin）王国の聖地である手付かずの自然が残されている「アウィン火口湖」における観光開発の事例は、観光という「外部からのまなざし」にさらされたアウィン王国内の自然や文化を、観光資源としての新しい価値に創り上げようとする動きをも含んでいる。観光の進展について、石森秀三は「文化の商品化」と表現し、自然景観の変化をはじめとする地域変容を引き起こす可能性が高いことを述べている〔石森秀三 1991：20-21〕。エコツーリズムを始めとする観光の発展において、筆者はこれらの地域の人為的変容を批判する立場をとるのではなく、本研究を通して地域住民自身が自律的に自分達の民俗文化の価値を認識し、その変容について判断することを望むものである。

エコツーリズムは観光の新しいあり方を示す言葉として使われている。その意味する内容は多様であるが、筆者はエコツーリズムを「旅行者が非日常的な自然環境や異文化に触れることにより、そこから何かを学ぶ旅」と定義しておきたい<sup>8)</sup>。エコツーリズムを実践するには、触れたり、学んだりできる多様な自然や文化が存在していなければならない。そのためには、生物多様性の保全、自然景観の保護、多様な民族文化の伝承が必要である。そして、その体験を通して、人びとは自分の心の中に自分なりの理想郷や楽園を新たに見いだすのである。筆者はエコツーリズムとは、多様な経験を通して自分自身の心が生まれ変わる旅である、とも考える。

筆者は約18年前に実施したカメルーンでの初めての現地調査の時から、ティカールの人びとの心の中に潜んでいる「神聖王」についての観念が何故生まれてきたのか、その根源が何であるのかといったことに興味を憶えてきた。そして、日本という国に生まれ育った筆者が、何故彼らの自然観や世界観に興味を持つに至ったのか。これは筆者自身への問い掛けとなっていた。これらの疑問を持つにいたったきっかけは、ティカールの王国における現地調査を通して、古代の日本人も抱いていたと考えられる自然観や世界観と同様な文化を伝承してきた人びとの生活に触れたからである。

そして、ティカールの人びとが伝承してきた王国文化と彼らの自然観の中に、筆者はヒト・自然・超自然の関係における普遍的な一つの姿を見いだせるのではないかとの確信を持つに至った。本論文では、筆者自身のティカール社会への「旅」を通して明らかとなった、王制社会を維持してきた人びとのコスモロジーと土着的なエコロジー思

想に焦点をあてる。それは、今後の自然環境や伝統文化との調和が保たれた環境デザインを考える上で重要な示唆を与えるものであると共に、適切な観光開発が行われれば、ティカールの王国地域を魅力的なエコツーリズムの目的地と成し得ると考えるからである。

## 2.2 自然と文化の観光価値

カメルーン共和国は、東西・南北約8,000km、人口約5億人、53の国々があるアフリカ大陸の中央部に位置する国である<sup>9)</sup>。アフリカ大陸の自然環境は砂漠、サバンナ、熱帯雨林など変化に富んでおり、社会情勢や文化も地域により千差万別であるが、面積約48万km<sup>2</sup>（日本の約1.3倍）のカメルーン共和国は、赤道が通る国土の南部が熱帯雨林で覆われ、北部に行くにつれて乾燥し、チャド湖周辺ではついにサハラ砂漠の周縁部に達する。また、人口は約1,500万人（日本の約10分の1）で、民族集団数は南部のエウォンド（Ewondo）、ファン（Fang）などのバントゥー語族、北西部のティカール、バミレケ（Bamileke）、バムン（Bamoun）などのセミ・バントゥー語族、北部のフルベ（Fulbe）、ハウサ（Hausa）やブーム（Mboum）などのスーダン（Sudan）語族など200以上といわれ、農業・牧畜が盛んな国である。これほど気候、植生、民族が多様な国はアフリカの中でも珍しく、カメルーンは「アフリカの縮図」であるといわれている<sup>10)</sup>（地図1）。

カメルーンはケニア（Kenya）、タンザニア（Tanzania）などの東アフリカの国々や南アフリカ共和国（Republic of South Africa）と比較して宿泊施設・道路の整備状況、知名度、観光客数のいずれもが低く、観光開発がこれまで十分行われてきたとはいえない。旧宗主国であったフランスやイギリスをはじめとするヨーロッパからの観光客は多いが、日本人観光客を見かけることはほとんどない。しかし、比較的安定した政治情勢や自給率の高い食糧事情により、今後の展開が期待できる国であろうと考えられる。その理由の第一に、ユネスコの世界自然遺産に登録されているジャ（Dja）動物保護区や、氷河期以前からの森林が残されているといわれるアフリカ最古といわれる熱帯雨林、コーラップ（Korup）国立公園を始めとして多くの貴重な自然が、この国には残されていることを挙げることができる。

また第二の理由には、近代国家体制の中においても、カメルーン西部を中心とする農山村地域にはアニミズムの土着宗教と神聖王を崇拝する人びとによって支えられた数多くの王国が現存することである。これらの王宮では毎年様々な儀礼祭祀が催され、また染織や鋳金、木彫、陶芸などといった伝統工芸品の職人技術が残っている。このような国外からの観光客が期待する「プリミティブなアフリカ・王国や伝統工芸」に対する好奇心に応えることができるだけの王国文化が伝承されてきている。筆者はこれまでの現地調査においていくつかの王国を訪れたが、そこにはエコツーリズム資源としての

多様な自然及びそれと一体化した素朴な生活文化が存分に存在していることを確認できた。

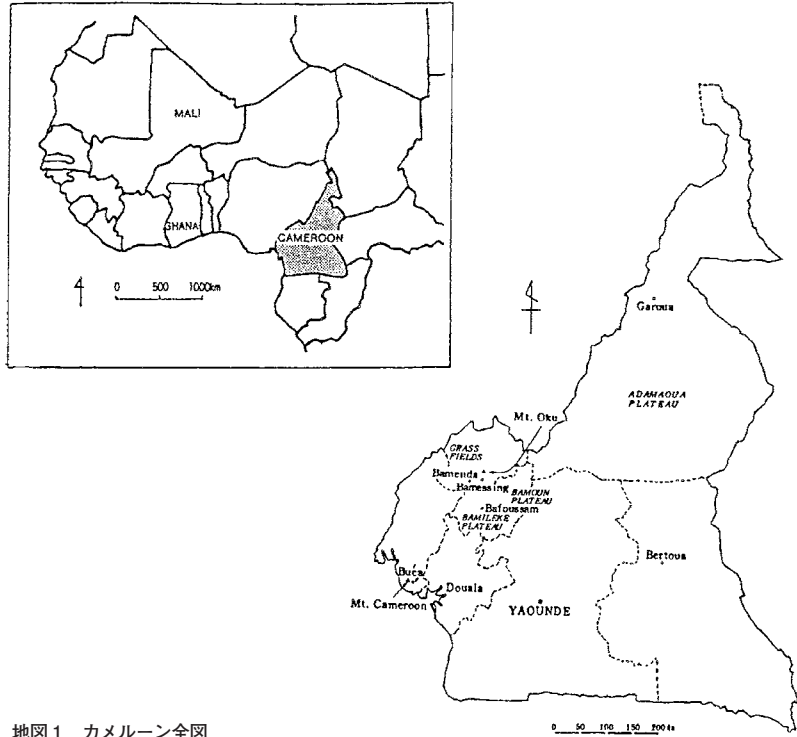
本論文では、カメルーン共和国北西州に主として居住するティカールの人びとの民俗文化に焦点をあてる。この地域で注目される事は、農耕や牧畜を基盤とする伝統的な数多くの王国が現在も地方行政の末端組織としての機能を有していることである。各王国では王が居住する王宮を中心として、アニミズム的な土着宗教に基づく様々な伝統的儀礼が行われており、それらの民俗文化が貴重な文化遺産としての価値をもち始めている。例えば、筆者が長年に亘って現地調査を続けているバフツ王国は、北西州の州都バメンダから北へ約15Kmと、観光客誘致の立地条件に恵まれ、資源としては案内情報拠点の役割を果たす王宮を基点に、王国の領域に広がる草原地帯において風景を楽しむ山歩きや乗馬を楽しむことが可能である。カメルーンの伝統的王国は独立以前から自律的な地域社会として存在してきた。エコツーリズムの開発は、自律的な地域社会の存在を抜きにして考えることが難しいため、これらの王国は今後のエコツーリズム開発を進める上で、重要な役割を果たすと考えられる。

本論文の研究対象地域であるこの高原地域は、筆者にとり王国文化を通してヒトと自然との関係を調査研究する場であるが、この地域を訪れる観光客にとってもカメルーンの伝統文化と雄大な草原風景を楽しむ、さらに近年の著しい人口増加に基づく農耕地の開発による森林破壊の現状を学ぶことができる、エコツアーの重要な目的地の一つである。

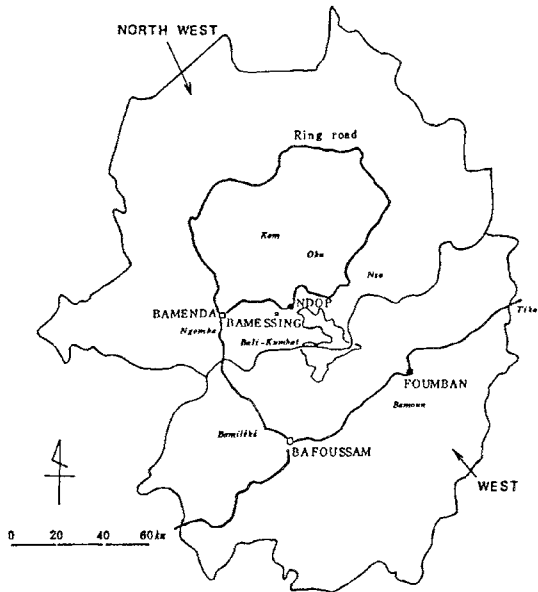
このように、カメルーンでのエコツーリズム発展の可能性は高いといえるが、その反面、課題も多い。カメルーンの現状は、交通網や宿泊施設の整備及び旅行会社の数が十分とはいえない。観光省はエコツーリズムを柱とした観光基本計画の策定を目指しているが、低迷しているカメルーンの経済を立て直すには、より一層の社会基盤施設整備と観光産業の健全な育成が必要である。

一方、環境保全に関しては1992年に国レベルで環境森林省が設立され、海外からの援助を得ながら先述したコーラップ国立公園やジャ動物保護区だけではなく、様々な環境保全事業が進行中である。それらの地域では、住民参加、環境教育、エコツーリズムが事業を進める上で重要な鍵となっている。

総じて、カメルーンの観光は大衆的な観光の段階まで達しておらず、ヨーロッパからの個人客や少人数グループ旅行が主体であり、また、都市部を除き宿泊施設や交通手段も団体旅行客を受け入れるだけの内容を有しているところは少ないといえる。また、観光資源のある多くの地域は農山村地域で、地域経済の活性化や生活基盤整備、自然環境保全などの課題を持っている。言い換えれば、カメルーンの観光を考えるには、必然的にエコツーリズム的な発想が求められるのである。具体的には、地域住民に対する環境教育やインタープリタの育成、旅行業界の育成、地域における自然及び文化遺産の価



地図1 カメルーン全図



地図2 調査地周辺の部族集団

値の再評価と保全などが必要とされている。すでに世界自然保護基金（WWF）、パートナーシップ・インターナショナル、ヨーロッパを中心とする政府開発援助（ODA）などによる自然保護活動や地域振興計画が各地において進められている。政府レベルでは環境森林省と観光省が中心となって、エコツーリズムへの取り組みが始まっている。

カメルーン国内における多様な自然環境と民俗文化は、観光資源としての価値を持ち始めているため、それらをエコツーリズム資源としてどのように評価するかが問われているといえる。次節において、アウィン王国における事例を取り上げることにより、文化遺産に係わる観光開発のあり方について考察を行う。

## 2.3 アウィン湖の観光開発

### (1) 計画の概要

ここで事例研究として取り上げる「アウィン湖観光開発事業」(Lake Awin Touristic Project)は、カメルーン共和国政府観光省によるカメルーン北西州では最初の事業である。計画地域は、北西州の州都バメンダから南約20kmに位置するアウィン王国の領域内にあるアウィン湖の湖畔である。計画は10年以上前から考えられていたが、約1,600万CFA<sup>11)</sup>(約320万円)の事業予算で第1期工事が始まったのは2000年3月からで、現在も工事が進行中である。事業内容は、湖の周囲に敷地、道路、柵干、椅子、情報拠点、バンガローなどの整備を行うと同時にエコツアー案内人の養成を行い、アウィン湖を訪れる観光客に憩いの場を提供すると共にエコツーリズムの拠点を整備するものである。現在の工事に続く第2期工事の予算がつけば、ホテル、レストラン、ロッジ、テニスコート、湖への階段、放牧牛の水飲み場などの整備を行う予定である。北西州観光省の関係者によると、今後同様のエコツーリズム事業計画を同州内に存在する滝、湖、自然林地帯などの他の観光資源周辺においても整備予定しているという。

アウィン湖は火口湖であるため、湖畔は湖から流下する唯一の河川部を除き急斜面を形成している。湖畔地域の主な植生は、ユーカリ植林、自然林、草原、畑地である。観光省の担当者によると、湖畔において事業対象地を選定するにあたり評価した環境項目は植生、地形、景観、休養・娯楽利用、雨季の土壌浸食、宗教的価値などであるという。環境アセスメントの結果、施設整備が必要な事業対象地は自然植生林を避けてユーカリ植林地帯が選定され、その中でも湖の景観価値が高く、土壌浸食や斜面崩壊の危険性が少ない平坦地帯が選定された。休養・娯楽利用の面からは、パラグライダーや乗馬などが可能な草原が背後に控えている場所が選定された。エコツーリズムの計画とはこのような貴重な自然が残っている地域を対象にして、何らかの開発の手を加える行為であるため、その場合には環境に対する細心の配慮が必要とされるのである。

### (2) 土着的自然観とエコロジー思想

アウィン湖は、地元のアウィン王国の人びとにとっては、歴代王の祖霊が眠る聖地

である。アウイン湖は火口湖であるため現実には移動するはずはないのであるが、王国に伝わるアウイン湖に関する伝承によると、「もと湖があった場所の人びとがゴミを湖の中に捨て続けたために湖が怒ってその場所から現在の場所に移動してきた」という。この伝承には、アニミズム的な汎神論的信仰をもつ王国の人びとの自然観を伺うことができ、また、祖霊が眠っていると信じられている聖地であるアウイン湖の環境を大切に守っていくことが、現在、生きている王国の人びとを庇護してくれることとなり、今に生きる自分達にとって大変重要なことであり当然の義務であるという価値観を見いだすことができる。事実、現在のアウイン湖は環境破壊や水質汚濁などの環境問題は全く見受けられず、地域外から時折訪れる観光客はその美しさに感動を覚えるのである。マクハーグが唱えたエコロジーの思想に見られるような地域住民の自然観によって、王国の聖地であるアウイン湖の環境がこれまで大切に守られてきたのである。

この事例からいえることは、地域住民の心のよりどころである聖地の湖が観光資源としての新しい価値を持ちはじめたとき、その環境の持続可能な開発を図るためにはそれに見合った計画手法論とエコロジー思想が必要になるということである。適切な地域生態計画の手法と思想を基本として事業計画を立案すれば、湖畔や湖面を利用した様々な休養・娯楽利用の可能性や自然景観美をもつアウイン湖は聖地としての価値を維持できると同時に、エコツーリズムの適地ともなり得るのである。

このエコツーリズム計画の事業はまだ始まったばかりであるが、幸いにして、聖地であるにもかかわらず、この事業はアウイン王国の人びとに好意的に迎えられ、既に施設の施工によりかなりの資金が地元民に流入している。カメルーン政府観光省の担当者の話によると、その背景には、経済収入の増加に対する期待と、地域住民、行政、専門家などの計画関係者の相互間における、計画内容に対する合意の形成と努力があったとのことである。例えば湖畔の中でも特に歴代王の祖霊を宿していると信じられている場所は厳格に保護されている。近い将来において、これまであまり観光客の訪れることがなかった湖畔に観光目的のための施設が整備され、案内人や飲食品・土産物販売、交通サービス、施設使用料の徴収などにより、地域住民は経済的恩恵を受ける機会が増加すると期待するのである。

マクハーグが提唱した地域生態計画のエコロジー思想に基づき、この事業を考察してみると、今後このエコツーリズム計画において考慮されなければならないことは以下の点である。まず、アウイン王国の地域住民にとって経済効果を高めるだけではなく、その計画プロセスにおいて環境に対する外部からの評価の目にさらされるということ。次にこれを機会にして、住民自身がそれまで伝承してきた自然観を再確認すること。そして、自分達の環境保全や伝統文化に対する価値観をより明確なものとするものでなければならないということである。近代国家において、当然のことながら法による規制も必要であるが、その基本としてこれからも地域の伝統的な汎神論的自然観、宗教観を伝



承していくことが、アウィン湖の環境保全につながると筆者は考えている。

エコロジー思想に基づく環境アセスメントは、貨幣価値からみた計画による損益だけを判断材料とするのではなく、計画地域の生態系、すなわち全てが関連して存在している物理的や生物的、社会的、文化的環境に及ぼす計画の影響による社会的な費用が最少で、社会的な便益が最大になるものでなければならない。その際に最優先しなければならない価値は、地域生態系の自然作用である。またアウィン湖は地元のアウィン王国の人びとにとっては、先述したような清浄地伝説が言い伝えられている聖地である。地域住民にとってこの湖がもつと考えられている靈魂 (spirit) は、同時に住民自身が心の中にもつ魂でもある。マクハーグが提唱したエコロジー思想では、人間の心の靈魂と、自然が宿すと考えられる靈魂、彼の言葉で言えば「自然の作用」とが一体化するような環境を創造することが、環境デザインの目的でなければならない。筆者はこのような意味において、“自然に即したデザイン (Design with Nature)” は“自然に即した心 (Spirit with Nature)” によって達成されると考えたい。そして自然作用が示す真意に対して謙虚に耳を傾けると同時に、自分自身の心の中に宿す精神をも尊重しなければならないと考える。

またこのような観光開発の計画過程において、地域住民、行政担当者、専門家、利用者がそれぞれの立場で合意形成を図るためには、地域の生態学的特性と民俗文化が示すエコロジー思想に基づいた環境アセスメントの実施を経て意志決定がなされるべきである。

### 3 文化遺産としての王国文化

#### 3.1 王宮の空間構造

##### (1) 王宮建築

カメルーン共和国北西州には、200以上の王国が現存しており、それらの王宮は重要な文化遺産として価値づけることが可能である。

王宮の建築様式は伝統的な住居様式を基本型として形成されてきたようである。ティカールの住居様式は間取り、構造、意匠のいずれにおいても歴史的変遷を遂げつつあり、現地調査では様々な様式のものが見られる。王宮建築に関しても例外ではなく、過去に火災で焼失したバメッシング王国の王宮内の建築物は現在ではほとんどが日干し煉瓦壁とトタン屋根である。筆者が調査した他の王宮の建築様式も材料的には多様性が見られる。バメッシング王国から西北西へ約40km離れたバフツ王国の王宮建築は王の祖霊殿を除いて20世紀はじめにドイツ人建築家の指導により再建されたものである(写真1)。バフツから南へ約70kmのところにあるバンジュン (Bandjoun) にあるバミレケの王国の王宮は伝統的様式をかなり留めているが、王自身の居住する家屋は鉄筋



写真1 聖なる森を背後にしたバフツ王宮の佇まい



写真2 アビンフォ祭りで従者と共に踊るバフツ王

コンクリート造りである。また、バフツから東南へ約60kmのバムンの王都・フンバンにある王宮の主要建築物もドイツ人が建築したものである。

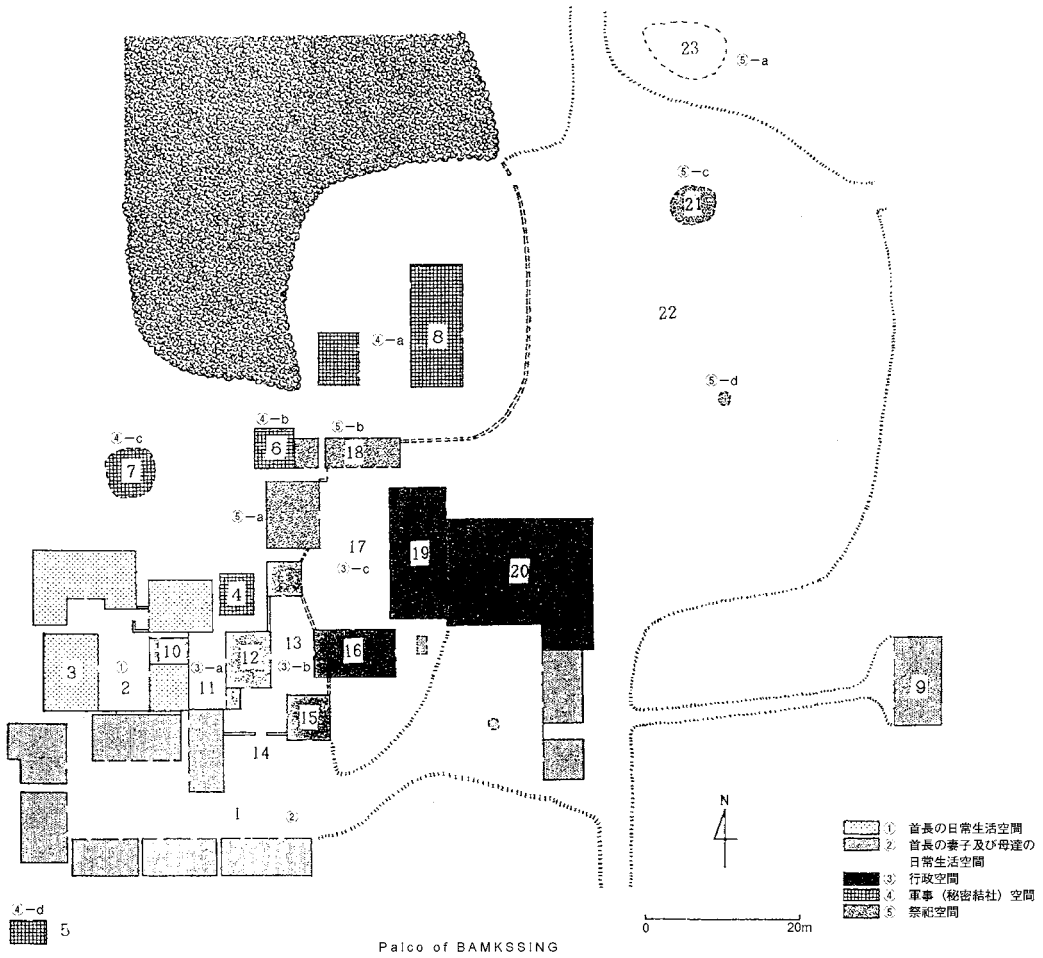
一方、現在も神聖王を中心とする伝統的な王制社会が存続しているため、全ての調査した王宮空間の構成と機能の面に関して、ほぼ共通する伝統的な空間構造を読み取ることが可能である。ティカールの伝統的な民家形式がこの王宮建築の基本型となり、政治、行政、儀礼を行う公共空間が付け加わることにより、一般民家よりは一層複雑化・大規模化した現在の王宮の様式が形成されたと推測できる。従って、王宮建築の様式と王制社会組織は表裏一体の関係にあり、王宮建築の空間的意味を知ることはその社会的・文化的背景としての伝統的王制社会を理解する一つの方途ともなる。

また、世襲の王をもつティカールにおいて、移住や王の世代交代によって王宮の場所が移動することは稀ではない。

## (2) バメッシング王宮の空間構成と機能

王宮空間とその他の住居空間とを比較して見ると、その様式や特質に主要な相違点が二つある。まず、屋敷が大規模になり、装飾性の高い、数多くの家屋が建っていることである。次に、家屋や堀で囲まれた多くの閉鎖的な中庭が構成され、隔離性の高い空間が存在している点である。このような特徴は長老階級の住居にもみられるが、王国で最も高位である王には様々なタブーが存在する。例えば食事をしているところを住民に見られたり、住民が直接、王の身体に触れることを禁じられているため、王は“世俗的な人びとが自由に立ち入ることのできない居住空間”に生活しなければならない。また王宮には、歴代の王の祖霊や大地の精霊を祭る神聖な場所や、さらに聖なる手さげバッグ<sup>13)</sup>が保管された家屋があり、これらの場所へ立ち入ることができる者は限られている。王宮には王の日常生活の場だけではなく、このような王制社会の秩序化に役だっている聖なる祭祀のための空間が存在するのである(図1)。

王宮の北の部分には森を背にして2棟のグンバ(Ngunba)と呼ばれる秘密結社の家屋の建っている空間がある。これらの家屋は精霊、祖霊、神霊などの超自然的な霊的存在を象徴する仮面や、太鼓をはじめとする様々な祭具を保管し、会合のために利用され、成人男子である構成員以外は立ち入ることができず、特に女性と王家の男性がここへ入ることはタブーとされる。グンバは呪術的・宗教的な意味合いが強いが、昔は軍事組織としても重要であったと考えられるグンバの構成員は王家を除く王国の男性であり、毎年祭りの前になると王国の各地区の代表者により、広場とグンバの間を仕切っている堀の作り替えが行われる。その堀はスピアグラス(*Arundo donax, fasoh*)の茎を組み合わせて作られている。グンバの有力メンバーである長老・貴族階級の男性達はより高い呪術性、宗教性、政治性を備えており、王家の祖霊や王国の精霊を祭り、王と共に政治的な会合をもつ秘密結社の空間は、王宮においては最も奥まった所に位置し、それに接して祭りの行われる広場、歴代の王の墓地、王と長老達の会合の場所がある。神



Palco of BAMKSSING

- 1 妻の空間 nje buntong
- 2 首長の中庭 nche funtoh
- 3 首長の家屋 kukuwu
- 4 使者の建物 ngeh nchefung
- 5 王家の結社の建物 ngeh buntong
- 6 特定のグンバ ngwer kuwar
- 7 会合の場 fonkoh
- 8 グンバの建物 ngeh nchangeh
- 9 首長の実母の家屋 ntoh nchang
- 10 面会の部屋 kuyu tiyuti
- 11 中庭 chefuh muwang
- 12 面会の部屋 kuyu nguwar
- 13 中庭 chohyu
- 14 入口 kuyu mabou
- 15 農耕儀礼の建物 ngeh ngeantoh
- 16 首長の事務所 ngeh buntong
- 17 中庭 choh fung
- 18 首長の墓 fung tute
- 19 村民協議会の建物 ngeh counsel
- 20 招待者の建物 kutaleh
- 21 屋敷神 ngoh kui
- 22 広場 kubei
- 23 首長の妻子の墓 sue buntong

図1 バメッシングの王宮 (Ntoh Nsei)

聖王を中心とする祭政一致の王制社会組織は、専制的に運営されることなく、この秘密結社の力とのバランスの上に成立しており、それは王宮空間の構成上からも読み取ることができるのである。

王が住民と面会しあるいは住民協議会を開催し、農耕儀礼を行う家屋群は王宮内において三つの中庭を囲む形で建っている。その広場に面する所には、祭りの際、来賓や招待者の見物席となる家屋が立つ。入口から王の私生活空間に近づくにしたがい、特定の者しか立ち入ることができない様に決められているこれらの公的な行政空間は、先に述べた祭祀空間の手前、王宮の中央部にあり、日常的な王の接客及び行政活動にあっては中心となる場所である。

公的な行政空間の最も奥まった場所にある4棟の家屋に囲まれた中庭を中心として、王の私的な日常生活空間が配置されている。この空間に立ち入ることができる者は王の妻子や特定の従臣に限られ、プライベートな場所として著しく隔離されている。

王宮の中で最も広い面積を占める家屋群が、王の妻子と母達の日常生活空間である。王の妻達は各人が占有する家屋または部屋を与えられている。これは各自が調理を行うための炉を共有することがないことが第一の原因である。先代及び現王の妻達の人数が多ければ多いほど家屋数も多くなる。女性達の居住する空間は、王宮敷地内を区切る中央を境として二分割され、各々が先代と当代の妻達の空間となっている。また、この女性の空間は、王の日常生活空間と行政空間により、祖霊を祭る祭祀空間や秘密結社の空間から隔てられている。このように王宮空間においても、一般民家にみられた男性と女性の二元的空間分割原理を、一層顕著に見いだすことができる。

王宮内及び集落内においては乾季の12月から2月にかけて、主な年中行事だけでも、王族の祖霊供養、屋敷神や水の神などの精霊祭祀、男性の秘密結社構成員の祭り、王族による神聖王の再生祝賀祭、住民全員による新年祭典など、様々な祭儀が順次執行される。3月から11月にかけての雨季の農耕作業は「ケ」の生活であり、神聖王が再生するまでの乾季の祭儀期間の前期は、死者の霊の再来と鎮魂、王の形式的不在など「ケガレ」の期間と考えることができる。これらの「ケガレ」をはらう行事を挙げる上で、中核となる空間は前述した祭祀空間であるが、神聖王が再生してから後の祭儀は主に、それらに隣接する王宮の広場で行われる。そこは王国の住民が全員集い、踊ることができる十分な広さをもつ空間である。普段は空虚感さえ漂うこの場所が、新年祭典の時にはドラムと木琴のリズムに合わせて踊る溢れんばかりの人の波で埋まり、まさに「ハレ」の時空がそこに出現するのである。筆者の2度の現地調査はいずれも農閑期の乾季に行ったため、ティカールの人びとの祭祀儀礼が同期間中に行われることから、王宮空間を中核として執り行われるこれらの儀礼を観察する機会に恵まれた。王宮の空間機能を理解するためにこの体験は、極めて有益であった。

祭政一致の形態をとる王制社会組織の特徴を、王宮の空間構成から考察した結果を

要約すると、次のように整理できる。

- ①王は宗教的祭祀者として権威づけられているが、毎年歴代王の墓地における供養儀礼には、王だけではなく長老・貴族階級の者も加わる。
- ②これらの者はグンバの重要な構成員である。しかし、王家の男性だけはグンバの構成員になることができないので、その祭祀儀礼の空間には立ち入ることができない。
- ③王家の男性を構成員とするンゲリ (Ngeri) と称する秘密結社がある。グンバのための空間とこのンゲリのための空間とは王宮内において、明確に区分されている。
- ④王の日常生活空間から奥まった後方の屋外に、王及びグンバとンゲリの上層構成員が会合する場所がある。

以上のことから考察できることは、王制社会組織の運営はその頂点にたつ神聖王である王が専制的に行うのではなく、実際には討論による話し合いを持ち、民主的な運営が行われているのではないかということである。

さらに、これらの祭政に係わる祭祀・行政の空間、秘密結社のための男性達の空間は王宮の入口から後方に位置し、入口の両側には王の妻子や母達の女性空間が配置されており、聖なる男性の空間と俗なる女性の空間が明瞭に区分されていることが分かる。

以上のような王宮空間の構成・機能原理は、王国の長老・貴族階級の住居をはじめ一般民家においても基本的に適合し、住居空間に関するティカールの人びとの民俗性を示していると考えられる。

### (3) バフツ王宮の空間構成と機能

一方、同じティカールのバフツもほぼ同様な空間構成をもっている (図2)。この王宮内には数多くの建築物が整然と並んでいる。草葺きのティカールの伝統的建築様式で建築された歴代王の祖霊を祀る神殿をはじめ、第一次世界大戦前のドイツ植民地時代に建てられた焼成タイル屋根をもつ王家の建物群が美しい王宮の風景を構成している。

王宮の最も奥まった空間には、王制社会の中心的組織である秘密結社クウィフォ (Quifor) の有力メンバーが会合をしたり、王国の重要な決定事項について王と話し合ったりする建物が煉瓦塼で囲われた中庭に面していくつも建っている。王宮の背後には、秘密結社のメンバーが薬草を採ることもある鬱蒼とした森によって覆われている。王宮の中心部には一段と背の高い草葺き屋根の祖霊殿があり、その周囲の空間は建物と煉瓦塼によりいくつもの中庭に区分され、それらの建物と中庭は王が主催するさまざまな儀礼に利用される。王は王国で最も重要なこの祖霊殿を守護する立場にあり、この付近のいずれかの建物で生活するといわれている。

王宮の入口から一番近い空間は、住民と王が王国内で起こったさまざまな問題につ

いて話し合いをする行政的利用が中心の場所である。さらに、王宮の周囲には王妃と王家の子供達の生活空間がその人数の多さに比例して広がっている。これら王宮内のそれぞれの空間へ、王制社会組織におけるさまざまな地位によって、立ち入れるかどうかといった規準が厳格に定められているのである。

このように王宮の空間構造を分析することにより、表面的には対立的であると考えやすい王と秘密結社の関係が、実は先述したように「王は秘密結社の息子である」とティカールの人びとが考える王制社会組織の真の姿を理解することができるのである。ティカールの人びとは、自分たちが信じるコスモロジーを再確認するために、王宮内において王を中心とするさまざまな祭祀や儀礼を行う。王と王宮は、家族を基本とする社会の秩序と人びとの幸福を願う心の象徴なのである。

## 3.2 王宮のコスモロジー

### (1) バフツのアビンフォ祭り

バメッシング王宮と同様に、同じティカールの王国であるバフツ王国の王宮内広場でも、毎年12月に王国内の歴代王の祖霊が眠っているとされる10ヶ所の滝や川と王宮内の祖霊殿において、供儀が執り行われた後、盛大にアビンフォ祭り（ABINE-MFOR）が開催される。

本節の内容は2003年12月5日から19日までの15日間、バフツ王宮を中心として行われたアビンフォ祭りに関する一連の儀礼の中で観察が許されたものについての現地調査報告とその考察である。アビンフォとは「王の舞踏祭」を意味し、この祭りの中で王が人びとと共に踊ることは、王国にとって現王の生命力の復活・再生を象徴すると同時に、一年の締めくくりと新年を迎える区切りを意味する。12月の冬至の頃は、バフツ王国が位置する標高約千メートルの高原地帯では乾季から雨季に移る季節である。農耕民・ティカールにとり、この祭りは農作物の収穫と祖先の庇護に感謝し、新年の豊作と人びとの幸せを祈る意味をもつ。

15日間にわたって開催されるアビンフォ祭りの内容を祭りのスケジュールに従って検討すると、儀礼と祝祭という両側面が含まれていることが判る（表1）。さらに、祭りの儀礼は全て男性を構成員とする秘密結社が執行する。各秘密結社の構成員は世襲制であり、担当する儀礼が明確に定められている。

祝祭としての祭りが最高潮を迎える日は、祭りが始まってから十三日目（2003年の場合は12月17日）である。この日は、朝から多くの参加者や来賓が王宮に参集し、普通アビンフォ祭りといえばこの一日を意味する。今回の現地調査では、一日目から祭りが終了する十五日目まで、王宮近くの村内に滞在して、多様な儀礼を観察することが許された。

(2) 祭りの内容

祭りを観察して印象的なことは、第一に「祓いの儀礼」が多いことである。一日目と八日目の2回、祭りが開催される王宮の入口にあたる各道路上に、葉草を用いた呪葉を埋めたり、蔓性植物の呪物を路上に置く儀礼が秘密結社・ブス (Nda Beusu) によって行われる。王宮内に外部から悪霊が進入しないように、これらの清めの儀礼が行われる。王宮内の空間を清浄にすることが重要なのである。

また、二日目の祭りの直近にあたる市の日には、秘密結社クウィフォによって市場において祭りの公告が行われる。

十三日目に挙行される祝祭に先立つ一連の儀礼の中で、五日目に行われるマメ科の一年生作物・ササゲ (*Vigna unguiculata*, Nkia) の穀霊を祀る霊殿の周囲を囲う柵・ヌキアニカン (Nkia Nikang) の取り替え作業が重要な意味を持つ。この作業はこの穀霊殿の管理を司る秘密結社ニカン (Nda Nikang), 王の使者・ンチンダ (Nchinda), さらに、王子を構成員とする秘密結社・タクンバン (Takumbeng) の三者によって行われる。早朝に王宮近くの林から採取された新しいラフィアヤシの葉を用いて、穀霊殿の周りを取り囲む柵を新しくする作業は夕方までかかるが、その間、王宮の住人と子供以外は王宮内に立ち入ることを厳禁される。王宮への各入口にはワラ (Wara) という名前の木の枝と葉で作られた杭 (Agibe) が立てられ、その目印とする。それほど、この穀霊殿の周囲を囲む柵を取り替える作業は慎重に行われ、いかにササゲの穀霊を祀ることが重要であるかが理解できる。

また、この儀礼を行う三者は、王国を構成する主要な三つの社会組織であるところ

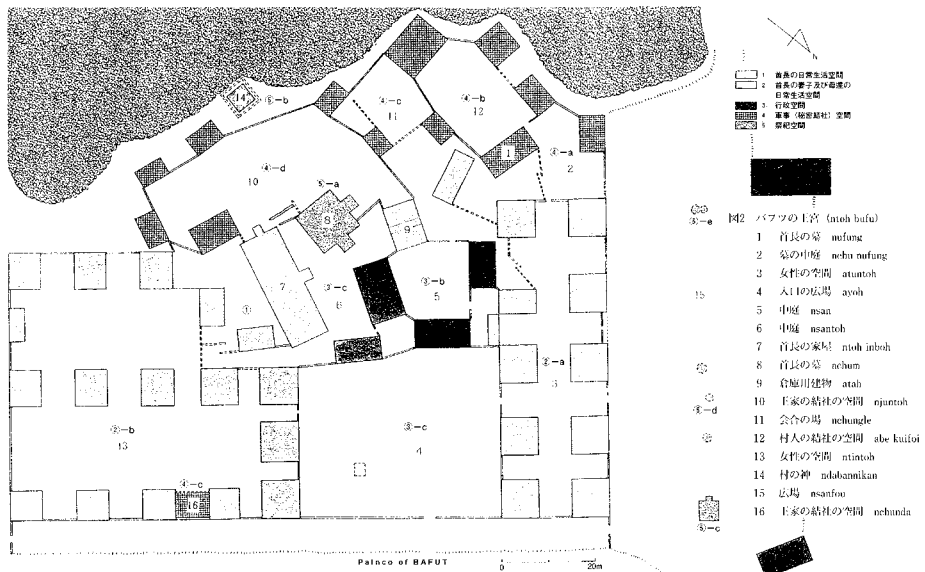


図2 バフツの王宮 (Ntoh Buhu)



の、王・フォン、王家以外の構成員による秘密結社・クウィフォ、王家の構成員による秘密結社・タクンバンであることから、農耕民の彼らにとって、農作物の豊穰のカミの象徴としてササゲの穀霊を祀ることの重要性を伺い知ることができる。

この日の夕方には、秘密結社・ブス (Nda Beusu) の行列が王宮内の結社員の空間から登場し、王宮内の各建物の入口や王宮への入口にあたる道路上に呪葉がふりまかれ、王宮内とその周辺部が清められる。行列は呪葉の入った土器を左肩の上に掲げ持つ秘密結社・クウィフォの長 (Tanda Quifor) を先頭に、二人のジュジュ (juju 精霊)、土器の皿を頭の上に載せた一人の女性、さらにその後、弦楽器・笛・太鼓を演奏する数名ずつの楽師が続く。これも祭りに先立つ一連の祓いの儀礼の一つと考えられる。

六日目と七日目には王宮の背後にある森近くの奥まった秘密結社の空間において、秘密結社ンダンシェ (Nda Nsie)、ンガンクウィフォ (Nda Ngang Quifor)、クウェブル (Nda Kweburu) がそれぞれの儀礼を行う。今回これらの儀礼を観察することは許されなかったので、その詳細な内容は分からないが、彼らが信じる祖霊、精霊などのカミガミに対する供儀が行われるのであろう。

九日目に、王国の聖職者達ブタブニューイ、ブマブニューイ (Buta Bunwi, Buma'a Bunwi) は、王国内に十カ所存在する歴代王の祖霊が宿っていると信じられている川や滝などの聖地へ赴き祖霊供養を行う。最も遠い聖地・ネフォ (Nefo) は滝の一つで、王宮から徒歩で往復数時間かかる距離にある。彼らは担当する聖地ごとに数名ずつのグループを編成し、鉄製のダブルゴングを持つ者を先頭に、供養に使うヤシ酒、カムウッドの粉などを携帯する者が後に続く。半年間は乾季でほとんど降雨の無い熱帯の気候条件において、王国を守護する祖霊としての歴代王達は、最も居心地の良い涼しく年中水の涸れない場所に今も生き続けていると信じられている。

これらの聖地で行われる祖霊供養の様子を直接観察することは今回許されなかったが、聞き取りによると、この儀礼において供物を載せた木の葉を聖地の水面に浮かべるとそれが水中に沈み、次に浮かび上がってきた時に供物が無くなっていけば、祖霊が願いを聞き入れたために祭りを開催して良いことを意味するのだという。聖職者達が聖地での祖霊供養を無事終えて祖先をたたえる歌を歌いながら王宮に戻ってくる際には、王家の秘密結社・タクンバンの太鼓が打ち鳴らされ、王女達が出迎える。アビンフォ祭りは、農耕儀礼の性格と共に祖霊供養の意味をもつ。

聖職者達はさらに、王宮内の屋敷神が祀られている聖地において祭祀儀礼を行う。特に重要な屋敷神が祀られている王宮の奥まった場所における儀礼は、王自身が秘密結社クウィフォの長 (Tanda Quifor) ともう一人の長老と共に行う。その際に、最高位の聖職者でもある王は、祭りに関連する宗教的儀礼を行う際の秘密結社員と同様に、上半身裸になり、下半身には藍染めの木綿布を巻いたよそおいで登場する。これまで着飾った王の姿にしか接したことがない筆者が、神聖王の雰囲気漂わすバフツ王のこの

表1 アビンフォ祭りの内容 (2000年の場合)

月日	時間	場所	祭祀内容	主体
12月5日 (Yika)	16:00 ~	王宮周辺の道路各所	悪霊払い儀礼	秘密結社ブス (Nda Beusu)
	22:00 ~	王宮	ヌキアニカン (Nkia Nikang) の通知・公告	秘密結社バボ (Mbabo) 秘密結社タクンバン (Takumbeng)
12月6日 (Yijong)	13:00	市場	アビンフォ (Abine-Mfor) の通知・公告	秘密結社クウイフォ (quifor)
12月9日 (Mumitaa)	6:00 ~ 17:00	王宮とその周囲	ヌキアニカン (Nkia Nikang) の取り替え (その間、王宮への部外者の立入厳禁)	秘密結社ニカン (Nda Nikang), ンチンダ (Nchinda) タクンバン (Takumbeng)
	17:00 ~		清めの行進儀礼	秘密結社ブス (Nda Beusu)
12月10日 (Mitaniba'a)	5:00 ~ 12:00	王宮	秘密儀礼	秘密結社ندانシェ (Nda Nsie)
12月11日 (Nkoofikuu)	15:00	王宮	秘密儀礼	秘密結社 ンガンクウイフォ (Nda Ngang Quifor) 秘密結社クウェブル (Nda Kweburu)
12月12日 (Ntooba' a)	7:00	王国内の道路各所	悪霊払い儀礼	秘密結社ブス (Nda Beusu)
12月13日 (Yika)	10:00 ~ 22:00	王宮と王国内の聖地	聖職者達が王宮から王国各地の歴代王の祖霊が宿る川・滝などの聖地へ赴き祖霊供養を行う。王は秘密結社クウイフォの長とともに王宮内の屋敷神を祀る。	王 (Mfor) 秘密結社クウイフォ (quifor) 聖職者集団 (Buta Bunwi, Buma'a Bunwi)
12月14日 (Yijong)	5:00 ~ 16:00	王宮と王国内の聖地	薬草を採りに行く。 バフツ王国の聖なる旗チーワラ (Tsitewareh) をンゲンウィ川 (Ngeunwi) で洗い清めて王宮の広場に持ち帰る。	秘密結社ワウオ (Wa-woo) 秘密結社チーワラ (Nda Tsitewareh)
12月15日 (Njwila' a)	16:00 ~ 19:00 ~	王宮内広場 王宮内	王の踊り、第1日目開始。 仮面クト (Kertoor) が登場する。	王家の人びと 秘密結社クト ( Nda Kertoor)
	16:00 ~ 19:00 ~	王宮内広場 王宮内	王の踊り、第2日目開始。 仮面クト (Kertoor) が登場する。	王家の人びと 秘密結社クト ( Nda Kertoor)
12月17日 (Mumitaa)	9:00 ~	王宮	伝統的軍事結社マンジョン (Manjong) が王宮に招待される。加入儀礼ミンフォ (Mieh-mfor) が挙行される。	楽団レレ (Lele)
	10:00 ~	王宮内中庭	来賓への祝宴。	王 (Mfor)
	12:30 ~	王宮	叙勲式	王 (Mfor)
	14:00 ~ 14:30 ~	王宮内広場 王宮内広場	伝統的軍事結社マンジョン (Manjong) の祝祭行事と、王、王家、王国民による踊り。	王 (Mfor) 全ての王国民
	19:00	王宮内中庭	主要メンバーへの祝宴。	
12月18日 (Mitaniba' a)	17:00	王宮内広場と中庭	アビンフォ (Abine-Mfor) の終了儀礼。王宮内広場に展示されていた王国旗や祖霊像を王宮内に仕舞う。	王、王家の人びと、秘密結社
12月19日 (Nkoofikuu)	7:00 ~ 18:00	王宮内中庭	祭りの終了に際し、王に収穫物を献上した女性達や王女達へ、王から塩とヤシ油が分配される。アビンフォ祭りの終了。	

・“DECEMBER 2003 ABINE-MFOR FORTNIGHT PROGRAMME” に加筆修正。

ような姿を拝したのは今回が初めてであった。

十日目の早朝、秘密結社・ワウォ（Wa-woo）は、山へ薬草を採取しに行き王宮へ持ち帰る。その昔、王国の繁栄は強い軍事力を必要とした。秘密結社・チーテワラ（Nda Tsitewareh）は、勝利の象徴である王国の聖なる白い旗を管理する。この日の午後から、チーテワラ結社はこの旗を王宮内から持ち出しンゲンウィ川（Ngeunwi）で洗い清める儀礼を行う。その際、王の権威の象徴である象牙の笛が吹き鳴らされる。王は川で洗い清められた旗が王宮に戻されるのを待ち受ける。その後、この旗は祭りが終わるまで、王宮の広場に掲げられる。この儀礼の後、いよいよアビンフォ祭りの開始が宣言される（Mboo Abine）。

これに続く十一日目と十二日目の二日間は、太鼓、木琴、笛などの伝統的な楽器を用いた楽隊を中心にして、王と王家だけによる踊りが王宮の広場で練り広げられる。この踊りは十三日目の祭り本番の予行演習的な役目を果たす。アメリカ合衆国に留学中で祭りに合わせて5年ぶりに帰国した現王の第一夫人の長男も、家族と共にこの両日の祭りに久しぶりに参加していた。

この二日間の夜に、ササゲの穀霊を象徴する仮面・クトー（Kertoor）がクトー結社員（Nda Kertoor）によって霊殿（Nda Nikang）から持ち出され、王宮内にある王家の人びとの家々を巡る。この儀礼において、王は村人に王の農場（Nso Mfor）で収穫されたササゲを分配し、その豊穰力を与える。五日目に行われたササゲの穀霊殿を囲む柵・ヌキアニカン新しいものに取り替える儀礼とともに、穀霊の御神体である仮面・クトーの儀礼が行われることから、アビンフォ祭りは農耕収穫祭的な性格もあるといえる。

十三日目は、アビンフォ祭りの中心となる日である。この日は午前中から楽団・レレ（Lele）が村内を巡り、王宮で祭りがあることを知らせて回る。王国の七つの伝統的軍事結社マンジョン（Manjong）のメンバーも、祭りの参加者や見学者と共に王宮に集合する。午前中、王宮の中庭において、加入儀礼・ミンフォ（Mieh-mfor）が行われ、この儀礼を受ける者は王から名前と王に挨拶する地位を拝受する。2000年の12月に開催されたこの王の再生を祝う新年祭において、筆者は王から直接に秘密結社への加入儀礼を受け、さらに貴族の称号を拝受する機会に恵まれた<sup>14)</sup>。

また、来賓として招かれた近隣の王国の王、行政関係者、外国人などのために、王自らが昼食会を催す。午後からは王宮の広場において叙勲式が行われる。その年に王国や社会に対して功績のあった人びとに四種類の勲章が授与される。その後、鉄砲の上空への一斉発砲を合図にして、軍事結社・マンジョン（Manjong）の構成員による戦いの演技が披露される。この行事は、近隣の王国との戦いの歴史を再現することにより、王に対する忠誠心を表現するものである。それに続いて、ついに王の踊りが始まる。王自身が立ち上がり、従者、秘密結社の長老、王家の人びとと共に踊るのである（写真

2)。この頃には王宮の広場は踊りに参加する者や見物人で溢れかえり、結社員や長老だけではなく、王国の老若男女が王を中心に踊るのである。祝祭としてのアビンフォ祭りの雰囲気は最高潮に達し、その場に参集した全ての人びとは、王と共に過ぎ去った年への感謝と新たに迎える年への願いと喜びを実感するのである。夜には、王宮の中庭で無事祭りが終わったことを労う王が主催の祝宴が開催される。この日は一日中、様々な祭礼が挙行されハレの場が演出されるのである。

翌十四日目の夕方に、王と王家が中心になって祭りを締めくくる儀礼が王宮で行われる。祭りの期間、広場に掲げられていた旗や展示されていた祖霊像が、王が見守る中、それぞれの秘密結社によって王宮内に仕舞われ、供儀が行われる。これらの聖なる旗と祖霊像は、祭りの期間の夜だけ登場するササゲの穀霊を象徴する仮面・クトと共に、王国繁栄の象徴であり、王国の秘宝である。祭りにおいてこれらの秘宝を公開するにあたり、王宮内と王宮への各入口において前述したような祓いの儀礼が丁寧に行われることから、如何にこれらが王と王国にとって人びとの願いがこもった大切なものであるかが分かる。武力、祖霊、穀霊を象徴するこれら三種の神器を公開するアビンフォ祭りは、王国の繁栄がこれらの伝統的な力によってもたらされるものであるという彼らの土着的な信仰の姿を示している。アビンフォ祭りに表れる彼らの信仰心が伝統的な地域の活力の源泉となっているのである。

祭りの余韻が冷めやらぬ最終日、王宮の中庭において、プランテン・バナナなどの収穫物を王に献上した村人や王女達に対して、王から塩とヤシ油が分配され、アビンフォ祭りは終了する。

アビンフォ祭りにおける彼らの信仰に基づく多様な儀礼を観察して分かったことは、普段は王と50人ほどの家族が静かに生活する場所にしかすぎない王宮が、まさしく王国で第一の聖地であるということである。王宮内には神聖王の住居空間を中心にして、聖なる森、秘密結社の儀礼空間、祖霊・穀霊・精霊の祭祀空間、祭礼に使う民族芸術品の収蔵空間などがあり、王国社会の土着宗教に基づく信仰の拠点となっているのである。そのため、ティカールの王宮は、最も重要な文化遺産であるといえる。

## 4 考察

### 4.1 文化遺産とエコツーリズム

本論ではティカールの人びとが、何故、王を戴く王制社会組織を伝承してきたのかを明らかにするために、王国の聖地や王宮の空間構造と機能の側面から分析した。

このように王宮の空間構造と機能は、王を中心とするティカールの王制社会における人びとの世界観や宗教観をもとにした一つの小宇宙をみごとに再現したものであるといえる<sup>15)</sup>。カメルーン共和国という近代国家の中において、ティカールが伝承してきた

伝統的な王宮は、祭政一致による統治の中心地から、人びとのコスモロジーに基づく神話を再確認し文化的独自性を示す場所として、その存在意義が変容してきているといえる。さらに、近年においては文化遺産として観光資源の価値も重要となってきたのである。

本研究における筆者の問題意識は、西洋から広まった大量生産・大量消費型の近代社会の価値観が、地球上の自然環境を破壊する原因を成してきたという仮説に基づき、環境問題に対応するためには、自然と共生してきた多様な民俗文化における価値観や自然観を再評価する必要があるのではないか、というところにあった。ヒトが自然をどのように認識してきたかを明らかにするために、本論文では、筆者がこれまでに現地調査を継続してきたティカールの人びとを実例として取り上げ、王宮を中心とした生活空間とそこで繰り広げられる儀礼に垣間見る自然観について分析を行ってきた。その際に王制社会の人びとが継承してきた民俗文化の「エコロジー思想」に関して、以下の新たな知見を得ることができた。

- ①神聖王を中心とする王権社会組織は、ティカールの人びとのコスモロジーに基づき伝承されてきた彼ら独自の民俗文化である。
- ②王国において伝承されている儀礼、また、それらが執り行われる聖地の立地条件から、彼らの汎神論的、アニミズム的な自然観が、今尚、色濃く残存する。
- ③住居や王宮の空間には、彼らの祖霊崇拜に基づく祭祀空間が存在する。
- ④自然環境に適応して生活するための拠点である住居の建築過程を分析することにより、ティカールの人びとは住居空間を通して、自然、社会、超自然との係わりを絶えず確認しながら暮らしている。
- ⑤神聖王が居住する王宮の空間構造に、王国の社会構造や彼らのコスモロジーが反映されている。
- ⑥観光を始めとする外部社会からの影響により、「不可視の力」を信じてきたティカールの人びとの伝統的な自然観が変容しつつある。

そこで、観光客という「外部からのまなざし」が、現地の自然破壊を抑止させ、ティカールの人びとが伝承してきた自然観と自然環境を保全する契機となる可能性を指摘できる。

筆者が本研究において明らかにした、以上のようなティカールの王国文化における人びとの伝統的な自然観を再評価し、この地域の開発をする際には、それを環境デザインの根拠とすることが重要である。

日本各地や海外においてエコツーリズムの調査・研究を行っている真板昭夫<sup>16)</sup>は、「エコツーリズムは、1970年代以降の持続可能な開発に対する自然保護を推進するため

に必要な経済手段と観光産業側からの取り組みという二つの立場からたどりついた共通の概念であり、地域資源をいかに持続的に利用していくべきかを模索する流れと、地域資源をいかに保護管理していくべきかを模索する議論が活発化し、この議論を基盤として徐々に形成されてきた」[真板昭夫 2001:16-17]と、述べている。さらに、エコツーリズムの概念として、以下の三つの目的の上に成り立つ観光システムであると定義づけている。

- ①自然環境の保護、管理の運営を通じそれらの資源が持続的に、かつ適切に利用できるよう、資源を保全していくこと。
- ②地域社会の活性化と地域産業を育成すること。
- ③①と②を成り立たせるために、地域固有の資源を生かした観光手段を導入し、産業として成立させること。[真板昭夫 2001:23]

以上のような、地域の自然環境の保全を前提としたエコツーリズム開発を行うには、本論文において考察したように、地域の人びとが継承してきた民俗文化の中から、地域住民の自然観、エコロジー思想を把握することから始めなければならない<sup>17)</sup>と、筆者は考えるのである。

## 4.2 今後の課題

カメルーン共和国での筆者の王国文化に関する研究は、ティカールの王国であるバメッシングやバフツにおける現地調査を発端としてスタートした。その際の筆者の問題意識は、ティカールの人びとが自分たちの王国文化の一つとして伝承してきたアニミズム的、汎神論的な自然観から、我々は何を学ぶことができるのだろうか、ということであった。

これまでの分析により明らかになったように、神聖王を戴くティカールの人びとが創造してきた王国の聖地や王宮の空間構造には彼らのコスモロジーが反映している。自然環境や目には見えない超自然の力に対する人間行動のあり方や秩序が、王国の社会組織と王宮の空間構造から読み取ることが可能である。さらに民俗の精神的な宇宙観が率直に表現されているティカールの聖地、王宮、伝統的住居からは、近代的な建築や生活空間が保持しえない自然の風景に溶けこんだ人間性豊かな場所の意味を発見することができる。

エコツーリズムを考える上での文化遺産とは「持続可能な生活文化」そのものを意味するのではないだろうか。アフリカの民俗文化は、無文字社会の歴史、口頭伝承文化、神話・民話・祭祀などの精神文化の豊かさといった特徴をもつ。本研究では、その一例としてティカールの王国文化について考察した。

自然と民俗文化を体験する観光の一形態であるエコツーリズムは、自然遺産のみを対象とする観光ではなく、自然に適応して生きる人間の生き方を学ぶ観光でもある。そのため、広義の文化遺産としての「地域の民俗文化」を学ぶ観光であることを忘れてはならないと考える。

## 謝 辞

本論文は、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科に提出した学位論文の内容を抜粋し、その一部に修正を加えたものである。論文の作成にあたっては、昭和61、63年度、文部省科学研究費補助金（海外学術調査・代表者 大阪芸術大学 森淳名誉教授）による「西アフリカにおける伝統工芸技術の比較研究」の2回にわたるカメルーン調査や、平成6年度学校法人塚本学院「塚本英世記念国際交流計画」に基づく海外研修員派遣制度による「カメルーン共和国における景観計画とエコツーリズム」をテーマとした現地調査、さらには、平成13年度、文部省科学研究費補助金（基盤研究（A）（2）・代表者 竹内潔・富山大学教授）による「アフリカ熱帯森林住民の文化保全と内発的発展に関する研究」の現地調査によって得られた調査資料を基礎とした。

また、これまでに筆者が著した研究報告ならびに論文や、平成11年度から13年度までの3年間に渡る国立民族学博物館の共同研究「自律的観光の総合的研究」（代表者 石森秀三教授）、大阪芸術大学・芸術研究所補助金「西アフリカ・ギニア湾沿岸地方の伝統工芸の研究」（代表者 森淳名誉教授）における環境と文化の保全・活用をめぐる共同討論会から得られたものが大きい。特に、国立民族学博物館の名誉教授和田正平先生を始めとする諸先生には様々な示唆に富むアドバイスをいただいた。また、現地調査にあたりカメルーンの多くの関係者にお世話になった。

筆者がアフリカにおける文化と環境の研究を進める上で、森淳先生（大阪芸術大学名誉教授）、清水正之先生（同客員教授）および井関和代先生（同教授）、ハーヴィ・シャピロ先生（同教授）、には長年にわたり御指導をいただき、本論文の作成にも多くの御教示や御助言をいただきました。また、海外調査においては、塚本学院・塚本邦彦理事長をはじめ、学院及び大阪芸術大学事務局の方々にも多くの御配慮を賜りました。ここに謹んで御礼申し上げます。

最後に、故・中根金作先生（元大阪芸術大学学長）には、生前に数々の御指導、また筆者がアフリカ研究に携わる機会を与えていただきました。ここに記して、深甚なる謝意を表します。

## 注

- 1) イアン・L・マクハーグ米国ペンシルベニア大学名誉教授は、1920年スコットランドに生まれ、1950年ハーバード大学ランドスケープ・アーキテクチャー修士号、翌年同都市計画学修士号を取得し、1954年より1986年までペンシルベニア大学ランドスケープ・アーキテクチャー&地域計画研究科学科長・教授。都市・地域計画分野において、エコロジーの思想をふまえて多様な自然環境要因を評価する計画手法を確立した先駆者として高く評価されてきた。一般的にエコロジカルプランニング（地域生態計画）と呼ばれているその計画論により、2000年度の日本国際賞（国際科学技術財団）の都市計画分野において、「生態学的都市計画プロセスの確立と土地利用の評価手法の提案」を授賞対象業績として、同賞を受賞した。

- 2) 聖なる力をもち、神と崇められる王の概念を意味する。
- 3) アフリカの土着宗教と神話に関しては、[嶋田 1992: 119, 120], [阿部 1994], [Griaule 1948], [Parrinder 1967] を参考とした。
- 4) J. ヤーンは、A. カガメ (Alexis Kagame) の著書、“*La philosophie Bantu-rwandaise de l’Être*” に示されたバンツー系の人びとの哲学体系を、理解が容易なかたちで説明した。
- 5) 「ntu 普遍的な力」については、[ヤーン 1987: 115-116] において詳細に説明されている。これは具体的には、「靈魂、祖靈、精靈、聖なるもの、神、生命、自然作用」などの力としてとらえられているようである。
- 6) 「目に見えない力 (道理)」を信じるティカールのコスモロジーについては、バフツ出身の考古学者アソンバン氏の論文が詳しい [Asombang 1999: 56]。
- 7) 新しい観光のあり方を示す様々な言葉としては、マスツーリズムに対して、オルタナティブツーリズム、サステイナブルツーリズム、グリーンツーリズム、ヘリテージツーリズム、カルチャーツーリズム、エスニックツーリズム、ネイチャーツーリズム、アドベンチャーツーリズムなどがある。
- 8) エコツーリズムの歴史は、1972 年に開催された国連人間環境会議や、1980 年に発表された「世界環境保全戦略」、さらに、1992 年に開催された国連地球サミットの中で提唱された「持続可能な開発」の概念を、観光分野にあてはめることによって明確化されてきたものである。日本では、1990 年に環境庁がエコツーリズムを提唱し、1993 年に日本旅行業協会 (JATA) が「地球にやさしい旅人宣言」をした。その後、1994 年に (財) 日本自然保護協会 (NACS-J) が「エコツーリズムガイドライン」を作成し、1998 年には日本旅行業協会 (JATA) が「エコツーリズムハンドブック」を出版した。1998 年にはエコツーリズムに関する全国組織として、日本エコツーリズム推進協議会が設立された。国連は 2002 年を「国連国際エコツーリズム年」に指定した。日本エコツーリズム推進協議会では、エコツーリズムの三つの柱である、①自然・文化の保護と保全、②地域資源を生かした観光の推進、③地域経済の活性化、をバランスよく達成することにより実践できるとしている。
- 9) カメルーン共和国は、国土面積 47 万 5 千平方 Km、人口 1 千 5 百万人、全国が 10 州に分かれ、それぞれの州都が国内の主要都市群を形成している。それらの中でも政治の中心地は首都のヤウンデで、経済の中心地は南西部の大西洋・ギニア湾に面した国際港都市のドゥアラである。これらの都市域以外には自給自足に近い生活が営まれている農村地帯が広がり、豊かな自然と伝統文化を保持する農業国である。
- 10) カメルーン政府観光省が作成した観光パンフレットによると、カメルーンは“アフリカの縮図”といわれている。その理由は、南部の熱帯多雨林からサバナ草原、さらには北部のサヘル地帯 (サハラ砂漠の南縁部) まで、多様性に富んだ自然環境があるためである。また、それらの自然環境の違いにより、狩猟採集民、農耕民、牧畜民などの様々な生業をもつ多様な民族集団が存在するからである。“アフリカ大陸の多様な自然と民族文化にふれる事ができる国”というのが、カメルーン観光省のキャッチフレーズである。そこでは、7カ所の国立公園や 11カ所の野生動物保護区における野生動物サファリや保養、大西洋岸における海浜リゾート、標高 4070m の活火山・カメルーン山をはじめとして国内を南北に貫いている火山地帯の景観とそこでのトレッキング、各民族集団の民族工芸と伝統文化などの観光資源が紹介されている。
- 11) CFA (セーファー) フランは、フランス領西アフリカおよびフランス領赤道アフリカに属していた諸国において使用されている通貨の単位。フランス・フランとの固定レートをとり、1994年に1フランス・フラン = 50CFAフランから100CFAフランに切り下げられた。



現（2002年）時点におけるレートは、凡そ1円=5CFAである。

- 12) 2000年12月28日現在、カメルーン共和国政府観光省北西州代表、フムナン・S・ジョセフ (Fomunung S. Joseph) 氏からのヒアリングによる。
- 13) ティカールの人びとはラフィアヤシの葉柄の繊維によって製織された布で、ラフィアバッグを製作し、日常生活の中において使用する。秘密結社組織の成員は、会合に参加するときに必ずこのラフィアバッグを持参する。その中には呪薬が入っているといわれている。王宮内に保管されている特別なバッグは、ニワトリの羽根で被われ、王だけがふれることができるという。
- 14) 王に挨拶する資格を与えられる加入儀礼 Mie-nfor において、筆者がバフツ王から拝受した名前は Nchuala' a (村を治める人) という。また、バフツ王国における貴族の階級と称号 (勲章) は次の通りである。1, Abaa-mungoom (男女) (ベルのついたバッグ), 2, Ntingoo (男) (ヤマアラシの針), Abang Nitong (女) (腕輪と赤いワッペン), 3, Anjare (男) (カトラス), Asangni-ieh (女) (馬のしっぽ), 4, Nguh (男) (レッドフェザー) (発表者が拝受したタイトル), Abaa Booh (女) (バッグとヒョウタン) である。
- 15) カメルーン人の社会学者 B.P. ソー氏は、王宮はコスモロジーの象徴であると述べている [ソー 1971]。
- 16) 現在、京都嵯峨芸術大学観光デザイン学科教授である真板昭夫氏は、日本におけるエコリズムの調査研究を推進してきた中心人物の一人であり、日本エコリズム協会の理事でもある。
- 17) 真板昭夫氏は、エコリズムの先進地であるガラバゴス諸島やコスタリカ、我が国における西表島、南太平洋のフィジー諸島のケーススタディー分析に基づき、エコリズム開発の発展過程として、四つの過程とその過程を形成する七つの段階が認められると述べている。第1フレーム：資源の価値付けと担保過程（第一段階：地域外の権威者による点的な資源の価値付け、第二段階：資源の価値認定と面的担保）、第2フレーム：住民による資源価値の認識過程（第三段階：論争を契機とした地域住民全体での価値資源への再認識、第四段階：住民参加による資源の発見）、第3フレーム：地域内外の人びととの情報の共有化と郷土意識の育成過程（第五段階：情報のストックと共有化による地域住民の郷土意識の育成、第六段階：自然資源を地域内外の人びとに紹介するセンターの設立および活動の組織化による外部との交流拠点の確立および責任の明確化と、外部との連携に基づく活動の質的充実）、第4フレーム：エコリズム参加者による積極的な地域づくり参加への過程（第七段階：エコリズム導入による経済社会変動を踏まえた「地域づくり活動」への展開） [真板昭夫 2001 : 24-26]。

## 文 献

阿部年晴

1994 『アフリカの創世神話』、東京：紀伊国屋書店。

Asombang, R. N.

1999 “*Sacred centers and urbanization in West Central Africa*”, In *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa*, Edited by S. K. McIntosh. Cambridge: Cambridge University Press.

- Chilver, E. M. & Kaberry, P. M.  
1967 “*Traditional Bamenda, The Pre-colonial History and Ethnography of the Bamenda Glass field*”, Ministry of Primary Education and Social Welfare and West Cameroon Antiquities Commission.
- Denyer, S.  
1978 “*African Traditional Architecture*”, Edited by P. Oliver. London: Heinemann.
- Durrell, G.  
1963 [1973] “*The Overload Ark*”, London: Faber and Faber.  
(『積みすぎた箱舟』, 浦松佐美太郎訳: 講談社学術文庫)
- Griaule, M  
1948 [1997] “*Dieu d’Eau : Entretiens avec Ogotemmel*”, Paris: Fayard.  
(坂井信三・竹沢尚一郎訳『水の神ードゴン族の神話的世界』, 東京: せりか書房)
- 端信行  
1987 「王のダンスーカメルーン高地における王の儀礼」『アフリカ民族学的研究』  
和田正平編, 127-145, 京都: 同朋社。
- 市川光雄  
1989 「住居」『アフリカを知る事典』, 197-199, 東京: 平凡社。
- 井関和代  
1989 「バメンダ高原・バメッシング村に於ける「ラフィア染織」について」『藝術』11,  
41-56, 大阪芸術大学。  
1992 「ラフィアバッグの村」『季刊民族学』61, 78-89, 千里文化財団。
- 石森秀三  
1991 「観光芸術の成立と展開」『民族音楽叢書 6 観光と音楽』石森秀三編集, 17-36, 東京:  
東京書籍。  
1996 「観光革命と二十世紀」『二十世紀における諸民族文化の伝統と変容 3 観光の二十世紀』  
石森秀三編集, 11-26, 東京: ドメス出版。
- IUCN (The World Conservation Union)  
1980 “*World Conservation Strategy : Living Resource Conservation for Sustainable Development*”, IUCN, Gland: Switzerland.
- IUCN/UNEP/WWF  
1991 “*Caring for the Earth: A strategy for Sustainable Living*”, IUCN, Gland: Switzerland.
- Jahn, J.  
1961 [1987] “*Muntu: An Outline of the New African Culture*”, New York: Grove Press, Inc.  
(黄寅秀訳『アフリカの魂を求めて』, 東京: せりか書房)
- 海津ゆりえ・真板昭夫  
1999 「What is Ecotourism?」『エコツーリズムの世紀へ』, 18-35, 東京: エコツーリズム推  
進協議会。
- Laclavere, G.  
1980 “*Atlas of the United Republic of Cameroon*”, Paris: Editions Jeune.
- 前田弘  
1997 「マレーシアの舞踊ショーー伝統音楽の観光化に関する表現形態の比較分析」『東南ア  
ジアにおける伝統音楽の観光化』熊本大学文化人類学調査報告第1号, 43-85, 熊本大  
学文学部文化人類学教室。

真板昭夫

- 2001 「エコツーリズムの定義と概念形成にかかわる史的考察」『国立民族学博物館調査報告  
23 エコツーリズムの総合的研究』, 石森秀三・真板昭夫編, 15-40。

間瀬啓允

- 1996 『エコロジーと宗教』, 東京: 岩波書店。

McHarg, I.L.

- 1969 [1994] “*Design with Nature*”, New York: Natural History Press.  
(『デザイン・ウィズ・ネチャー』, 下河辺淳・川瀬篤美総括監訳, 東京: 集文社)

森淳

- 1980 「西カメルーンバメッシング・チーフダムの陶芸」『藝術』5, 19-30, 大阪: 大阪芸術大学。  
1987 「西カメルーン・バメッシングとその周辺地域における土器製作技法について - 成形法を中心に」『アフリカ民族学的研究』和田正平編, 829-848, 京都: 同朋社。  
1992 『アフリカの陶工たち 伝統工芸を追って二十年』, 東京: 中央公論社。

Murdok, G.P.

- 1959 “*AFRICA: Its Peoples and Their Culture History*”, New York: McGraw-HILL.

Neba, A. S.

- 1987 “*Modern Geography of the Republic of Cameroon, Second Edition*”, New Jersey:  
Neba Publishers.

Ngwa N. E.

- 1982 “*The Bafut Chiefdom: A Panoramic Geographical Study*”, Yaounde: The University of  
Yaounde.

Oriver, P. (ed.)

- 1971 “*Shelter in Africa*”, New York: Praeger Publishers.

Parrinder, G.

- 1967 [1991] “*African Mythology*”, New York: Peter Bedrick Books.  
(松田幸雄訳『アフリカ神話』, 東京: 青土社)

Prost, H

- 1952 “*L'Habitat au Cameroun*”, Paris: Publication de L'Office de La Recherche  
Scientifique Outre-Mer.

Rapoport, A.

- 1969 [1987] “*House Form and Culture*”, New Jersey: Prentice-Hall, Inc.  
(『住まいと文化』山本正三・佐々木史郎・大嶽幸彦訳, 東京: 大明堂)

Ritzenthaler R. & P.

- 1962 “*Cameroons Village: An Ethnography of the Bafut*”, Publications in Anthropology 8,  
Milwaukee Public Museum.

Service, E. R.

- 1971 [1991] “*Profiles in Ethnology*”, New York: Harper & Row.  
(増田義郎監修『民族の世界』, 東京: 講談社)

Soh, B. P.

- 1987 「カメルーン高地社会における王権の象徴 - その意味と役割」端信行訳,  
和田正平編著『アフリカ民族学的研究』, 105-126, 京都: 同朋舎。

Shapiro, H. A.

- 1997 “*Ecological Planning in East Asia: Its Past Present and Future*”, A Doctoral

Dissertation, Kyoto University.

嶋田義仁

- 1992 「アフリカの宗教」『アフリカの21世紀 第2巻 アフリカの文化と社会』日野舜也編、東京：勁草書房。

下休場千秋

- 1987 「カメルーン・バメンダ高原ティカール族の住居」『藝術』10, 58-71, 大阪芸術大学。  
 1991 「ティカール族の首長制社会における伝統的住居」『西アフリカにおける伝統工芸技術の比較研究』代表者森淳, 文部省科学研究費補助金(国際学術研究)報告書, 77-108, 大阪芸術大学。  
 1992 「ティカール族の風土と宮殿空間 - 中央アフリカ・カメルーン共和国の現地調査より」『藝術』15, 48-60, 大阪芸術大学。  
 2001 「自律的観光と民族芸術-カメルーン共和国の事例を中心に」『国立民族学博物館調査報告 21 ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』, 石森秀三・西山徳明編, 173-188。  
 2001 「エコロジカルプランニングの思想とエコツーリズム」『国立民族学博物館調査報告 23 エコツーリズムの総合的研究』, 石森秀三・真板昭夫編, 129-137。  
 2002 「中央アフリカ, カメルーン共和国における神聖王国のコスモロジー-ティカール族の事例を中心に」『藝術研究』第6号, 191-208, 大阪芸術大学大学院芸術文化研究科。

Smith, Valene L.

- 1989 [1991] “*Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*”, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.  
 (『観光・リゾート開発の人類学』三村浩志監訳：勁草書房)

Tabuwe, A.

- 1978 “*Achirimbi II : Fon of Bafut*”, Yaounde: Agracam.

上田正昭・上田篤編

- 2001 『鎮守の森は甦る 社叢学事始』, 京都：思文閣出版。

和崎春日

- 1979 「バムン族の住居」『季刊民族学』10, 大阪：千里文化財団。  
 1990 「カメルーン・バムン王権社会のヤシ文化複合-民族文化の創造と現代的展開」『国立民族学博物館研究報告別冊』12, 和田正平編, 377-446, 大阪：国立民族学博物館。

山口昌男

- 1990 『アフリカの神話的世界』, 東京：岩波新書。

米山俊直

- 1990 『アフリカ農耕民の世界観』, 東京：弘文堂。

吉村元男

- 1997 『風景のコスモロジー』SD 選書 230, 東京：鹿島出版会。